春性堂しほ

特別
へ5
6590
36

へ5
6590
36

春興

年経ぬるにしたがひ老ぬる身の
なほうとかりしかこそ侍りしも
はしめよ祝祖の恩沃なりし宿至
ひなる因縁ぞ有りけん
松ふる身のかくれ里に田おろす　雨笑庵
惜しむぬれぬ山路の浅みどりに　天柳
春既暮て覚えぬ人に
の上ぞ人しるべやなるさま

学問信条をもし怠ることなく
怠らるゝ心あるべきなり
学問をなすと雖も世に出て政事の用に
立ることなし

楽以

物毒の徳を行ひて志をもつて
和をもつて貴しとなす聖人既に
言ふ人かゝんか
信じもせず如何ぞ思ひ上ケ日、

楽言

人ゝを教諭して費し給ふ能
委敷して言ひ知らるゝ事のみあるを
形容毒を恐んとなり
婦人に言ふものや 左盃子、

楽以

自然の道理を行ふ者ハ
永なる者なり

春の来ぬと人の告げねば

東雲

陶里

霞し春の門田を作る

うぐひす

小倉の山に鹿の啼く

東里

秋の来ぬと人の告げねば

東雲

うぐひす

春興

世を逃れて山の奥ふかく

住むとしなれば

月ぞ一ともなりて五月の初鰹

東里

菜の代をおとろかや春の門

ひろる

市中より住かゝ〜原宝ハ住るあ
なりて二国ハ安みある人の
紙式をもちゐて
門松の春咲り出るうゝ、
年暮の移く居をもこゝ取せハ
枝をもちて学て窮乏の底に
初依を待ハ
国く待わりしきを表て明ゆり　久柳

、
試る事ゝと松の移りゆ移、
、
心ゆ元を思しをを作さて
西白の御を家を忘ゆ明の春、
、
友交さ移紙と分りぬ
、
安乱の規式ゆ学ゆ

ほり出すこと仏家と俗の好める
方をもとりて
はしめ火鉢七徳の利益、
冥土のなかを知おもひ出す初夕
なれも
永境は世人の清交よりも
けうとしや年月まとの夢の如、
東西の隔を月は孤雲の
のやうみ行雲をも作きん
ちおもしかし傍ハやうに世界、
世界の境をとゝ世の法を用ひて
あまねく戸外より出して
けうとしこゝろ而おからり萬変、
変ゆゑ思ひこゝにあり出し
雲水の月と雲をやうしかる

こゝろとゝまりぬ

あゝ人の妻ゝ川ぞや柿笠、

今来古往の変化はさゝ山かゝ

神の市国のうつさしと作さん

ゆゝしき市奉かゝ空も空り

りり、

月かしと柳りとさゝりよ汝秋の

夏、

第一和よ煙柿と流して流ま

ハ二見ゝ浦ふ

和積て奉ゝしゝ空の富、

人ハ花ゝ月かゝるまを思ふ

伝しても空ゝ作りまして年

空ぬ、

古雪伝ゝ者ゝるゝと笑ひ少表、

永里ゝ此二株のゝやまかゝ

ゝりて

きふまてに年ぞ経にける　一示房

賀

年を経し人の寄辺を
しるしとて
はるかに仕の浦さびぬ
ぬめしてこそ年ぞの賀を
思ひたてまつりて
たまはるべき

若ちよ若やかやうにやうやうせ　春人

一の法の姫君の母屋年ぞの賀
にて親族参りて拝礼を宴
席を設けたりて
雙六ども打て
おのおのて
年ぞ経にけるやうの事のとく　陶里

六条院

蒼鬢玉かほ却てをのづから
賞してけるる

老ぬ春ぬかりけりえりぬ　そしらぬ　西五郎

、

二ふの貧年ゆ老てとして
ちゝ〳〵如栄やたゝ古り老のかな　徐氏庵

古年ぬ今〳〵目かゝ〳〵安て繰れて
形も家の繁栄ある園和雅見て　こゝろあを作て

落〳〵栄や扨る名しかとしさぬ　西五郎

ことし春恵〳〵ハ汝の玉雪雲
のゆ〳〵作るむ世人かゝり栄ゆ
金到の行者りて汝法を為の
検仏ゆ求るゆ元百余年　金〳〵
命元ぬと〳〵〳〵深や春恵〳〵　徐氏庵

仏ゆ春恵しの云式ゆ作もの
ゆ施ゑハ永美法ある飯尾行梅

ゑりをり相成候様ゝ
なれて相成る様の月花を作き
千百年経時を為るゝもの
祖師の恩沢より伝せる八稀なり
さまし八千枚謝のゝ忘るゝ
名利の如くを捨て家孔乃
仏と共てゝ捨て再拝
しまる命しと徒とゝ蓋策

の詞をゝ一句を研おゝ伝信
ゝ新めて作の一字を墨無し　古宗坊

、
求めをゝ身にをゝ見やその旅　陶里
恋しの慈り伝ゝぬる　古宗坊

、
東西より相学して語人をゝ
後世政宗より月花を

やうにとゝめるを尽様のかさとも
いうんゝ赤い宿舎くさせて
天皇を崇ふをめり〳〵低酒いせ
の学めしこゝ小〳〵行ふ所をかゝ
て越路紀の路の旅路をしおへら
月とう花ゆきて奥羽筑紫の
空をわしこゝ行ふおしからして
はし学ゝ多ゝ凡ゝ五十年ゝ
ゝ

そハ寺オの赤とのあとをりて陸
さんの丸ゝ如ゝ紙ゝの形ゝ
ゝかゝるゝしゝ
ゝ学ゝ
ゝ学ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

海山の名所をわうしされの者
ひとれ野をとりて来て一
きしに旅を作る

思しら川やうや十里も夫路　右梁坊
こゝ作ハ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ　み柳

、

蓮子の涙と以ハ雲ハ作らつ
くしく雲ハ作りて為株の柳

屈曲をしたくしあり柳ハ笠の
塔ハ為しを下ハ雲ハ柳をもして
雲しむりハ港路高柳くり
雲の小柳のたをかハ雲東河
あ〳〵くしかる雲ハ作ハ
旅ハ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ
くをハもし無して

柳落の雲柳や雲ハ作らハ雲ハ　右梁坊

柿子と墓

忠行の名や芳しさ学の中、
世を捨てし跡しし
代捨てし法師は墨をおそらして
宿りを後の世とちりて松風
ふり橋下砂ふかし月のまに
玉山を入ぬさ小弱学心をそ
ぬりしの覚を絵石と耳吹の

節をたさうを山路をとり絵り
ちあらしをさしを才はれ行へ
ふ法師行り柿伝侯を方く
ふ覚をを生を日毎の食為ま
衣の涙切蔵るを古柔なしと
吹風をしさ生はをうさをとし
ようを世をしを法りを苦の師の
ふ法師ふらを樹を一句の根

さてと刻めぬ
印材をのこの字ゑう出てき　藤森弘　佐栄坊

大社

年代新しくして大社の彩色
ぞるハ水年月中の皆ゆりゆり
新千社所寄竜紙いしく新堂ハ
八雲山の梢にして寒造乃紙
接ぎ沈ゆる動き速くて

ちらてハ造営ハ実行ら年代を
六十年をとて　公ゆり営繕
行ふ〳〵ゆ行ハ社ハ要雲を
炒りぬるの指皮板ち彩色施して
本社の中にハ沈りし石塔りを
神号を板ゑ志ゆるてをて
中〳〵に神さしてゆ古の志の
ハ〳〵廣おゑうゆまりて

非行のきつくおもむやうの

山集の僧しかるうて中陸を
そなはる衣裳行坊と唱を名ゝより
冊子と称ゝそなたに山坊古称
よあ金物数法ゝ吟あ先や
したが行せくし編作りて
行平に題格をもの山ゝ本しかを

係脇接さるを巻し刻を彫刻
風物法ゝ原ゝ唱生し巻
中よあ雲ゝて小規則ゝ法玉し
あゝいしさゝ行ゝ形先乃名あ
山行度ゝいゝ行ゝ金ゝ七ゝ
海内ゝ弘毛ゝ新ゝ金ゝ世衣
の原作ゝ吟ゝ僧ゝ 船茅乃
法作ゝ行ゝ行ゝんと隠集

伊勢の国にて若くし遠祥
会所にてまうけ
云ふ名をとゝ世の高き事や　、
花乃時

四季

こゝ浦川遠行まうけ
はるかに世をとゝ
あらしにたゝ
ゆくすゑ

新しのゝ
新しうし高者くの
さく孤松

古栄坊

新宮日吉宮に
の宮やうしかぶさ
四方をとゝ
世人とをとゝ
たしくと新しく心や世を者、

夕ぐれ一里ばかり出て汐干
なる
菜花や蓮の刈株の右左
山里や仏の花の折柴
雪の根岸にもとゞまる
蓮も実となりぬ和らぎぬる
祇園より出るおやかたなる

夕ぐれや一点ともる菜の花
ちの月ぬれもてゆくなる
ちゝ咲や俳諧の筆と出るなり
ゝもゝわの木綿のゆかの冬
二千里のもゝ海をゆきゝ月
移るや多陸の稲の莖
秋ちゝや徒り蔵の古ぬぎ
空薬やひとゝ花の色

風や雪ふり込む藤袴のうちに
羽をかりて雀こゑなき秋の家
秋立やかたてに見やる蔦の
紅葉かな　琴を伝ふる川
一宵は雨にぬれぬ宿かな　こうしの
牛をうる家のあるじや年の市
ねぶしやいつの世なる秋の月
初雪や杉の葉きしむ杉柳

二月や紙ぶすまを笑ふ山　二四
雲をはらはんの徒や梅の月
雲霧の沈れる見るやうつ川
雪と花やけ縁かりて在佛
杉風の吉野花見の招
家作や蕾をこもるこもるこ
坊をり火をむせをおしてを
波うか

三月の末つかたの明の春
押分て行くむやう桜見
ハ山ふみ迄拾ひ分ひろ
ひ分て雪
ぬ笠ハ迄ぬ先り二夜の月
雨中ニ二ツ物みて法形うか
来世の三ツ笠のむか桜木花

是近ハ弱芳居原の自筆

山ハ初ハ桜の
心のこゝろ
何ふ此をうしとも
是こ四むの筆を
雨を
笠ハ初ハ
笠物や床几
蔦物や小店
橋
雨桜
雨蛙
雪
風の

不心風吹る小屋の柿紅葉
鶏なく頃ゆく秋の淋しさ
こもりもや初月をうかべ山
初の雁や月の羽織の格子
暫て持つ扇もちりぬる秋
林とやかたくなの中の声
こゝ家数ふ月ゆうの
庫先の寒ゆう侍
花咲て沢も湯せぬ芋の実

毎宵行中行う雨
雨の白鳥のこゝも悔の加
口初雪
言のうの雨をもあ雨や鶴
岩中遠行初雪
鶴鳴うち雪ちりぬや雨の日
人日とあり
人ちゝ雪をあらう
雪とあり
あゝ雨をも風の雪や雪の物

鶯の声高くあるに日和かな　ヽ

若き梅や散りかゝる門の雪　ヽ

かきたれて日に暮りかゝる若菜哉　ヽヽ

若き梅や菜を摘んと流れ谷の水　ヽ

こちらとき来て散りや花の雪かな　ヽヽ

元来娘を伴ひより舟旅のむこうに
とりてもとめて秋をと思ひけるに此日東の
三日ありたるに苔の花ゆきとめきたるも
見へざりけり

花待や来ぬ人をまつ夜半に似す　ヽ

ぬるみ艶し日

さくらし浅木の人をと見上手　ヽ

けふも舟旅の事も思ひ立らんとやよれ
朱き色よ来しけるに梅の花咲しろ
ぬるとの菜を取りて山中宝流のおち絶ぬ
見えたりし林下の幽景をとめし

若菜ても寄せても旅のさす所　ヽ

上巳

居り花桜り似ぬやうらき雛むや桃の酒

○

信楽の山ぬるとし川や梅の花　ヽ

雲の色日やさくりはてらぬ川かな　ヽ

雪解て流れしるしや花なかり　ゝ
菜の花咲しからや山家の明かなり　ゝ
待かねし床の神祇柳ゝ哉　ゝ
川春のあゆみ志らめく雨の節　ゝ
　寄せかへる
春雨の流るゝ雨や雨の山　ゝ
枝ふる緑の弱き柳哉　枕鳥

三四　鶴五居
花ハ涼みもし宗の雨
庵ふる心の色や秋の月　ゝ
　花咲もしあめの露のしめつよ
　是のうちに宗祇の千句ハ
月をと寄すも花紅葉なき紅葉哉　ゝ
夜
思ひ出る身の涙しぐれや春の秋　ゝ
菊の井や露もはひ出る茶の花　ゝ

[illegible]

大きのうたり海や空の色

初秋

[illegible]

[illegible]

○

[illegible]

同[illegible]

秋乃山

[illegible]

[illegible]
建てゝ西門の御本尊の
信を宗と――妻帯を生涯
苦しけれども教の[illegible]詠の人を
[illegible]の子孫の[illegible]
光の陰のうつるを[illegible]
[illegible]の[illegible]
さてまた彼の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]